

第1学年社会科学学習指導案

1年3組 男子22名 女子18名 計40名

指導者 北岡 聡

【授業】 9:35~10:25 会場 1年3組 (2階)

【協議会】 10:40~11:50 会場 2年4組 (3階)

1 単元名 世界各地の人々の生活と環境

2 単元について

(1) 単元設定の趣旨

この単元は、学習指導要領の地理的分野の大項目「(1)世界の様々な地域」の中項目「イ 世界各地の人々の生活と環境」に入る。中項目では「世界各地の人々の生活の様子を考察するに当たって、衣食住や宗教とのかかわりを中心に、自然及び社会的条件と関連付けて考察させ、世界の人々の生活や環境の多様性を理解させる」ことをねらいとしている。

現在、世界各地では多くの人々が生活しており、その生活環境や生活様式は実に多様である。その様相は、「暑い地域」(熱帯)、「寒い地域」(寒帯)、「乾燥した地域」(乾燥帯)、「高地の地域」など、大まかに分けられた気候帯と重なるようにそれぞれの特徴が見られる。このような気候による地域的分類は、これまで多くの学者によってなされてきた。これまでに発表された世界の気候区分には、いくつか代表的なものがある。一つ目は、アリソフの気候区分である。アリソフの気候区分は、世界的な規模の大気大循環との関連において形成される気団と、その境界にあたる前線の位置の季節的な移動に注目し、夏・冬の天気を支配する主要気団のちがいによって世界の気候区分を設定した。基本的には赤道気団・熱帯気団・中緯度気団・極気団・一年中同一気団に支配される地帯・夏冬で気団が入れ代わる地帯の七つの大気候区分に区分される。二つ目は、ソーンズウエイトの気候区分である。アメリカ合衆国において、降水量と蒸発量を比較することで「有効降水量指数」を考案した。そして、この「有効降水量指数」に「有効温度指数」を加え、それら組み合わせて気候区分した。水分条件からA(多湿、雨林)、B(湿潤、森林)、C(亜湿潤、草原)、D(半乾燥、ステップ)、E(乾燥、砂漠)の5分類、温度条件からA'(熱帯)、B'(中温)、C'(低温)、D'(タイガ)、E'(ツンドラ)、F'(永久凍結)の6分類になる。三つ目が、本単元において取り上げる、ケッペンの気候区分である。ケッペン植生に着目し、その分布をもとにした気候区分を行った。まず、「無樹木気候」か「樹木気候」に該当するか否かの判別に始まる。前者は、乾燥帯、寒帯、後者は、熱帯、温帯、亜寒帯(冷帯)に分ける。ここで、乾燥帯と寒帯の区別は最暖月の気温、熱帯、温帯、亜寒帯(冷帯)の区別は最寒月の気温でなされる。ケッペンの区分方法はこれまで発表された気候区分法の中でも最も有名で、植生をもとにした気候区分は直接我々日常生活や産業活動と結びついているために地理学にとって極めて重要であるとされてきた。これは、人間の生活資源である衣食住の原料が、今日でもかなり高度に直接あるいは間接的に植物資源に依存しているからである。また、区分方法も比較的簡単であり、すぐれた点が多いことから現在でも社会科の教科書等で盛んに引用されている。

以上のように、様々な気候区分があるが、気候をはじめとした環境と人々の暮らしについては様々な考え方がある。「環境決定論」と「環境可能論」はその一つであり、地理的事象(産業、人口等々)が、環境によって決定されるというのが前者であり、環境はその可能性の幅を規定はするものの、具体的にどうなるかは別の要因で決まる、というのが後者である。はじめは世界各地で見られる生活の様々な特徴は、自然条件に大きく左右されているように見えることから「環境決定論」が唱えられた。しかし、私たち人類は自然条件に適応しながら、それを活用・克服しながら力強く生きてきたことも考えられることから、現在は「環境可能論」が主流であるとされている。それぞれの地域の生活は、その自然条件のなかで、「いかに生きるか」と向き合いながらその特徴が形作られてきたと言っても過言ではない。そういう意味では、自然条件がその地域における社会的な条件にも影響を与え、文化や技術進歩、経済発展においても大きな違いが見られるようになったともいえる。これらのことから、その地域の地理的諸条件による生活の特徴を探ることは、世界各地の人々の生活とその多様性を理解するとともに、人類が自然環境とどう向き合い、生活を創り上げてきたのかという足あとをたどることにつながると考える。そして、これか

ら先、生徒たちが向き合わなくてはならない地球温暖化など地球規模の諸問題を解決していくための見方・考え方を養っていくものとする。

(2) 生徒の実態

生徒たちは中学生となって2か月がたち、新しい内容に目を輝かせながら学習に取り組んでいる。地理的分野で扱う内容が世界に広がったことで、より広い視野で学習に取り組むことのできる喜びを感じている生徒が多い。「世界の姿」の学習においては、世界の国々について、国旗の意味や国名の由来について調べることで、それぞれの国の特徴を見出し、世界の国々への関心を高めている。また、地図や地球儀を何度も見比べ補助線を入れたり色分けをしたりしながら、大陸の位置関係や陸地面積、形状などについて正しくとらえようと意欲的に学習している姿が見られた。発言も多く、一生懸命な生徒たちである。一方、その発言の根拠となるものは、どこかで聞いたことがある知識であることが多く、目の前にある教科書や資料集、地図帳を手掛かりにして確かなものにしようという意識は少ない。資料を基にして発言すること、それらの資料をつなげて自分の考えをつくりあげていくことは、今後社会科を学習していく中でぜひ身に付けてほしい力であると考え、この単元を通して、確かな資料を根拠に自分の考えをもち、発言する生徒を育てていきたいと考える。

(3) 指導の構成

この単元においては、「仮説吟味学習」を取り入れる。仮説吟味学習とは、課題に対して仮説を立て、その仮説が正しいか資料を基に検証していき概念を形成していく学習である。生徒たちは、自分たちが立てた仮説が正しいかどうか調べるため、資料をじっくりと読み込んだり、資料を根拠に意見を述べるなどの表現活動を行ったりすることになる。そのことを通して、複数の資料を比較したり関係付けたりして、課題解決の糸口を見出したことを表現する力を養っていきたい。

そこで、「ケッペンは何に注目して気候を区分したのか」という課題について仮説を立て、その仮説が正しいのかどうかを5つの気候帯の雨温図や植生の図等の複数の資料を手がかりに検証していきたい。生徒たちは、単元前半で学習した各地域の生活や環境の特徴を振り返り、それらを根拠として仮説を立てたり検証の手がかりにしたりしようとするであろう。こうすることで、それぞれの気候の違いや生活の違いを大観することができ、世界の人々の生活や環境の多様性を再確認することができる。また、検証を通して、気候帯ごとに見られる特徴を「比較する」、分かったことを「分類する」共通点や相違点を「関係付ける」等の思考法を用いるようにする。検証や説明の際にこれらの思考法を意識させるようにすることで、世界の人々の生活や環境に対する社会的な思考力・判断力・表現力を高めさせるようにしたい。

3 単元の目標

- 世界各地の人々の生活と環境の多様性に対する関心を高め、それを意欲的に追究し、捉えようとしている。【社会的事象への関心・意欲・態度】
- ◎世界各地の人々の生活と環境の多様性を、自然及び社会的条件と関連付けた人々の生活の様子とその変容を基に多面的・多角的に考察し、その過程や結果を適切に表現している。【社会的な思考・判断・表現】
- 世界各地の人々の生活と環境の多様性に関する様々な資料を正確に読み取り、有用な情報を適切に選択して、活用することができる。【資料活用の技能】
- ◎世界各地の人々の生活と環境の多様性について、自然及び社会的条件と関連付けた人々の生活の様子とその変容を理解し、その知識を身に付けることができる。【社会的事象についての知識・理解】

4 全体計画（全9時間）

- 第1次：世界にはどのような地域があるのだろうか。・・・・・・・・・・・・・・・・1時間
- 第2次：暑い地域の暮らしには、どのような特徴があるのだろうか。・・・・・・・・1時間
- 第3次：寒い地域の暮らしには、どのような特徴があるのだろうか。・・・・・・・・1時間
- 第4次：乾燥した地域の暮らしには、どのような特徴があるのだろうか。・・・・・・・・1時間
- 第5次：温暖な地域の暮らしには、どのような特徴があるのだろうか。・・・・・・・・1時間
- 第6次：高地の暮らしには、どのような特徴があるのだろうか。・・・・・・・・1時間
- 第7次：ケッペンは何に注目して気候を区分したのだろうか。・・・・・・・・2時間
(本時2 / 2時間)
- 第8次：地球温暖化は私たちの生活にどのような影響を及ぼすだろうか。・・・・・・・・1時間

5 本時の学習

(1) 指導目標

世界各地の雨温図と植生の図を互いに比較したり分類したり関連付けたりすることを通して、ケッペンの気候区分は、植生で区分されていることを理解することができる。

(2) 本時で身に付けさせたい教科固有の思考力等

課題に対して予想し、複数の資料から予想が正しいのかどうかを検証する力。

(3) 取り入れる言語活動

複数の資料から検証した内容を自分なりの言葉で「説明する」。

(4) 期待される言語活動の有効性

「ケッペンは何に注目して気候を区分したのだろうか」という課題に対して、生徒は各地で見られる様々な違い（食物、住居、衣服、産業、行事、気温、降水量、植生等）を視点に予想を立て、その予想が正しいのかどうかを検証していく。そのために、土壌分布図や植生分布図などの主題図や、雨温図や写真などの複数の資料を基に比較・分類・関係付けていくことになる。ここで、検証した結果を共有し全体で課題を解決していくために、話し合いの中で検証結果を説明する場面を設ける。友達に分かりやすく説明するためには、改めて比較したり分類したり関係付けたりした内容を自分の中で整理し直すとともに、誰もが納得するように根拠を明らかにする必要がある。検証結果について説明することは、地理的事象の見方や考え方を育むとともに、社会的な思考力・判断力・表現力等を育む効果が期待される。

(5) 展開

学習内容と予想される生徒の反応	指導上の留意点
<p>○前時までの学習を確認する。</p> <p>○本時の学習課題を確認する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 前時における検証結果について振り返ることを通して、本時の意欲付けを図る。
<p>ケッペンは、何に注目して気候を区分したのだろうか。</p>	
<p>○仮説を検証する。</p> <p>気温【比較】</p> <ul style="list-style-type: none"> 「暑い」地域や「寒い」地域で分けられているくらいだから、気温が大きく関係しているはずだ。 それぞれで生活に違いがあったから、気温が区分に大きく影響しているはずだ。 雨温図Aと雨温図Bをみると、どちらも気温が高くなっているよ。 雨温図Cと雨温図Dを比較すると、同じ乾燥帯なのに気温が異なる。 雨温図Dと雨温図Fをみると、1年の変化が似ているのに、同じ区分じゃないね。 雨温図Eと雨温図Hと雨温図Iを比較すると、同じ温帯なのに気温が異なる。 雨温図Eと雨温図H・雨温図Iを比較すると、同じ温帯なのに気温が一定の地域と、変化している地域がある。 →仮説は、正しいとは言えなさそうだ× <p>降水量【比較】</p> <ul style="list-style-type: none"> 「乾燥している」「雨が多い」「雪が降っている」などは、その様子が降水量に表れるはずだ。 雨温図Aと雨温図Bを比較すると、同じ熱帯なのに降水量が異なる。 	<ul style="list-style-type: none"> 仮説検証は、容易だと思われる順番から始め、本時は気温→降水量→植物のように検証していくこととする。 仮説検証は、ほぼ例外がなければ正しく、例外があれば正しくないと補足説明をする。 検証している内容についての位置や範囲をいつでも確認することができるように、世界地図と気候区分図を掲示しておく。 気温と降水量の検証については、各気候帯の雨温図を比較・分類させるようにすることで、確かな根拠を基に説明することができるようにする。 各雨温図に番号を付けることで、検証の比較を行いやすくする。

<p>・雨温図[E]と雨温図[H]と雨温図[I]を比較すると同じ温帯でも、降水量はそれぞれに異なっている。</p> <p>・雨温図[F]と雨温図[G]を比較すると、冷帯と寒帯で気候が違うのに降水量は変わらない。</p> <p style="text-align: center;">→仮説は、正しいとは言えなさそうだ×</p> <p>植物【比較】【関連付け】【分類】</p> <p>・サウジアラビア（乾燥帯）とイカルイト（寒帯）の写真には、植物の緑が全くないね。</p> <p>・熱帯、温帯、冷帯、モンゴルの写真には、それぞれ植物が見られるね。</p> <p>・同じ乾燥帯でも、サウジアラビアは砂漠でモンゴルには緑があるよ。正しいとは言えないのかな。</p> <p>・樹木がある、ないでわけると、「熱帯・温帯・冷帯」と「乾燥帯・寒帯」に分けられるよ。これに、気温と降水量を関連させると説明できないかな。</p> <p>・熱帯、温帯、冷帯の木は、種類が違うぞ。樹木の種類が気候帯を分けているのではないかな。</p> <p style="text-align: center;">→仮説は、正しいと言えそうだ○</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・植生については、各気候帯の雨温図に対応する地域の写真を準備し、それぞれの植生の特徴をつかみやすいようにする。 ・前時までに見てきた各地域で見付けた植生に関する特徴にも目を向けさせるようにする。 ・樹木に気付かず、植生という仮説が否定された場合は、いったん受け入れた上で、もう一度注意深く写真を観察するように声かけを行い、樹木に着目させるようにする。
<p>○課題についてまとめる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ケッペンの気候区分の方法をワークシートにまとめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・植物で区分されるが、細分化は気温で区分されていることに触れる。 ・気候区分の方法をまとめることで、今日の学びをおさえる。

(6) 学習評価の観点

ケッペンの気候区分について、様々な資料を互いに関連付け、根拠を示しながら検証したことをもとに理解することができたか。

【社会的事象についての知識・理解】（ワークシートや発言等）

6 授業観察の視点

- ・ 社会的な思考力判断力表現力等を育むために、検証したことについて説明するという言語活動を取り入れたことは効果的であったか。
- ・ 「比較」「分類」「関連付け」という思考法を用いながら仮説を検証するようにするための教師の切りかえしは効果的であったか。

〔参考・引用文献〕

<内容に関するもの>

- ・ 福井英一郎『自然地理学Ⅰ、Ⅲ』 朝倉書店 1966
- ・ 鈴木秀夫・山本武夫『気候と文明・気候と歴史』 朝倉書店 1978
- ・ 田家康『気候文明史』 日本経済新聞出版社 2010
- ・ 高橋浩一郎『気候と人間』 NHKブックス 1985
- ・ 水越允治・山下修二『気候学入門』 古今書院 1985

<方法に関するもの>

- ・ 岡崎誠司「見方考え方を成長させる社会科授業の創造」 風間書房 2013
- ・ 岡崎誠司「変動する社会の認識形成を目指す小学校社会科授業開発研究」 風間書房 2009
- ・ 社会認識教育学会編「新社会科教育学ハンドブック」 明治図書 2012